

エッセイ、回顧録

アラビスト外交官の 39 年（第 13 回）

塩尻 宏

（中東調査会参与、元駐リビア日本国特命全権大使大使）

《東京：アラビア語通訳担当官の指名》

前回にも書きましたとおり、私の東京勤務中は所属する局課に関係なく、日本政府の招待で来日するアラブ諸国要人の受入れ作業や総理や外務大臣などとの会談の通訳に駆り出されていました。エジプト・イスラエル和平、イラン革命、イラン・イラク戦争などが起きて中東世界が大変革の時期でもあった 1980 年代前半の時期は、中東情勢に対する国際的関心も高く、訪日するアラブ要人の数も少なくありませんでした。

私が直接に関わった主な要人訪日案件として思い出すものだけでも、アラファト PLO 議長（1981.10）、ハーテム・エジプト国家評議会議長（1982.8）、ムバラク・エジプト大統領（1983.4）、ハリーフア・カタール首長（1984.4）、フセイン・ヨルダン国王（1982.12、1983.9）、アダサーニ・クウェート国会議長（1984.8）などのほか、サウジアラビアのヤマニ石油相、アラブ首長国連邦のオタイバ石油相、シリアのシャラア外相、クウェートのサバーハ外相、イラクのアジーズ副首相などの訪日もありました（肩書きはいずれも当時）。

これらの首脳・閣僚レベルの会談のうち私が通訳を担当した方々は、それぞれの人柄についての国際的な風評とは関係なく、いずれも極めて温厚かつ友好的な雰囲気の人たちであったと記憶しています。

ご承知のとおり、国内に資源が乏しい日本は、エネルギー資源を始め工業原材料や食料資源までを海外から輸入し、製品を輸出して経済を発展させてきました。今や国際金融情勢の動向にも注意を払う必要があり、日本国家の存立の根幹である安全保障問題を考えても、諸外国との円滑な関係がますます求められるようになり、日本と外国との要人レベルの会談の機会も一層増加しています。

今は余りないと思いますが、一昔前には米国要人を招いたレセプションで挨拶に立った日本側のお偉方の中には得意げに「米(コメ)を主食とする日本人は米国を最も大事な国と考えています」とか、また、アラブ要人を招いた席では「油断大敵との言葉があるとおおり、日本にとって石油が切れると大変なことになります」などと、日本人出席者のみのウケを狙った発言をする人が居て、通訳泣かせの場面に遭遇することが少なくありませんでした。

今では少しは改善されていると思いますが、30年前の外務省では、来日するアラブ諸国要人との会談に際して事前に会談場所の下見をすると通訳の座る場所が手配されていないことがしばしばありました。その場で関係者に掛け合っただけで片隅に椅子などを手配してもらいましたが、会談する総理や閣僚の周辺を取り巻く外務省幹部としては、少々外国語に長けただけの若手職員の存在にそれほどの関心を払う余裕がなかったのでしょう。事前に関係省庁と協議して練りに練った発言・応答要領に基づいて日本側の総理や閣僚が日本語で話しても、通訳がその趣旨を理解して適切なアラビア語で相手に伝えなければ有意義な会話は成立しません。私はそのことを機会あるたびに上司や関係者に訴えて、うるさがられていたことを今では懐かしく思い出します。

今もそうかもしれませんが、30年前には英語、フランス語の通訳はキャリアと言われる上級職の優秀な若手が務め、ロシア語、中国語、アラビア語などは、ノンキャリアと呼ばれる語学研修員や中級職員出身者が務めていました。語学研修員出身でノンキャリアの私

はその頃既に 40 歳を過ぎていましたが、キャリアの通訳担当は 30 歳前後でしたし、ロシア語や中国語の通訳担当も私より相当若い人たちでした。当時のロシア語通訳の一人はロシア語で落語ができると噂されほどで、いずれも優秀な人たちでした。首脳・閣僚レベルの会談には場慣れした通訳を使いたいとの上司の意向もあって、アラビア語通訳については私が指名されることが多く、後輩が活躍する機会が比較的少ないのではないかと気になっていました。

調査部分析課に在職中の 1984 年末の或る日に人事課の首席事務官から呼び出しがあり、「近年、来日する外国要人との総理・閣僚レベルの会談の機会が増加している状況に鑑みて、アラビア語を含む主要言語について、総理・大臣レベルの会談通訳に対応できる通訳担当官を指名することを考えている。ついでには、アラビア語の候補者を複数名教えて欲しい」との話がありました。優秀な後輩の存在が認知される機会と考えると、早速、私からは幾人かの優秀な後輩を推薦しましたが、「当分の間はあなたにも通訳をお願いしたい」として、1985 年 1 月に通訳担当官（アラビア語）の一人に指名されました。

1984 年 10 月にインドのインディラ・ガンディ首相が暗殺される事件が起き、その葬儀に出席した主要国首脳の間で活発な弔問外交が繰り広げられました。わが国からは中曽根康弘総理が特別機でニューデリーに赴き、主要国首脳との会談が行われました。アラブ諸国首脳との会談も予想されたことから私も急きょ動員されて英語、フランス語、ロシア語、中国語の通訳担当と共に同行しました。限られた滞在日数であったことから、結局、アラブ首脳との会談は実現せず、私はホテル待機だけでした。その頃の通訳仲間の一人が、先般駐中国大使に発令されたばかりで急死した西宮伸一氏であったこと思い出し心が痛みます。機知に富み好感の持てる人柄であった彼は、最優秀の英語通訳の一人として総理や大臣の信頼も厚い人物でした。大事な時期に大事な人を失ったことは誠に残念に思います。

《東京：東京大学講師に併任》

調査部分析課に配置換えになって1年半ほど経った1985年初めに、東京大学の板垣雄三教授（現名誉教授）から「急な話で申し訳ないが、4月から1年間教養学部でアラビア語の講義をお願いしたい」との連絡がありました。それまで非常勤講師として担当していた東京外国語大学の先生が急に在外研究に出ることになったためとのことでした。中東現代史を専門とする板垣教授は、以前からご縁のある方で、後に文化功労者に選ばれて日本学術会議の会員も務められた方です。そのような大御所からの思いがけない依頼でしたので戸惑いましたが、外務省内の上司・先輩や大学の恩師などに相談した結果、引き受けることとしました。

1985年4月に「東京大学講師に併任する」との辞令を受けて、週1回、駒場キャンパスに出向いて教養学部生向けの選択科目としてアラビア語を講義することになりました。それまで教わる立場に居た私が教える立場になることについては戸惑いを感じましたが、卒業後はやがてそれぞれの分野で指導的立場に立つことになる東大生がより広い視野を持つための一助になればと考えて、私が初めてアラビア語を目にした学生の頃を思い出しながら講義メモを作成しました。

日本人が一般に外国語と言えば、英語、フランス語、ロシア語などのヨーロッパ諸語やなどの中国語、韓国語などのアジア諸語などまでは想像できますが、アラビア語がどのような言葉なのかを具体的に想像できる人は限られていると思います。いわゆるローマ字でも漢字でもハングルでもないアラビア文字はまさにミミズが暴れているようにも見えますが、アラブ人らから見れば、漢字は文字ではなく絵に見えるようです。

一般の日本人には馴染みが薄いアラビア語ですが、古代ギリシア科学の文献の殆ど全てがアラビア語に翻訳されてアラビア文明が興

り、ヨーロッパに伝えられたことはご承知のとおりです。現在、そのアラビア語は中東地域の 20 数カ国の公用語となっており、約 2 億 3 千万人の日常語です。また、国連公用語の一つにもなっており、世界的に見れば主要言語の一つと言えます。

東京大学では、そのようなアラビア語について、文字や文法などの言語学的解説のみならず歴史的・社会的観点からもどのような言語なのかを説明してみようと試みしました。4 月の第 1 回目の講義は大教室で行われ、立ち見が出るほど盛況でしたが、選択科目でしたので様子見の学生がほとんどだったようで、夏休み前の 7 月半ば頃には 3 分の 1 ほどになりました。

講義の場にエジプト人の友人を招いてナマのアラビア語を聞かせたりもして学生の関心や興味を喚起しようとしたのですが、後期初めの 9 月には 10 数名となり、結局、最後まで残った物好きの学生は 5 ～6 名でした。1 回の講義時間は 90 分間でしたが、年間 52 週のうち春、夏、冬の休みがあり、祝日や入試などの行事と重なることもあったので、実際の講義日数は半分以下の 20 数日しかありませんでした。

拙い私の講義に最後まで付き合ってくれた学生全員には、感謝と共に、折に触れてアラビア語を思い起こしてくれることを期待して『日亜対訳 註解 聖クルアーン』（宗教学法人 日本ムスリム協会発行 昭和 58 年 6 月 30 日 第 2 版 非売品）を記念に贈呈しました。在京サウジアラビア大使館の友人の好意で私に寄贈されたものですが、世界イスラーム連盟（ラービタ：本部リアド）の認証を得た唯一の日本語・アラビア語対訳のクルアーンでした。B5 サイズで 800 ページ余り大部なもので、当時の紙質から 2 キログラムもの重さがあり、軽々しくは扱えないシロモノでした。

1 年間だけと言われて始めた東京大学での私のアラビア語講義は、次の年も依頼され、結局、1987 年 3 月までの 2 年間続きました。そ

の間に延べ 10 名ほどの学生とご縁ができました。そのうちの数名は外務省上級職員として入省し、既に中堅幹部として活躍しているのは嬉しく頼もしく思います。かれらの全員がアラビストではありませんが、アラビア語や中東について適切な理解を持った幹部職員になることを期待しつつ見守っています。

《東京：混迷する中東世界と創造的外交》

上述のとおり、1985 年 4 月から週に 1 回半日だけ東京大学（駒場）に出向いてアラビア語の講義を担当することになりました。当時在籍していた調査部分析課の上司は人事課からの打診に対して了解していたと聞いていましたが、しばらくすると課内で一人しか居ない中東担当が半日とは言え毎週欠けるのは業務に支障をきたし兼ねないと懸念しているとの話を仄聞しました。内々に省内の先輩アラビストなどに相談したところ、折角の機会でもある東京大学の仕事は続けるべしとして、早々に中近東アフリカ局（現中東アフリカ局）への異動が手配されました。その結果、1985 年 7 月に中近東第二課（湾岸班総括、サウジ担当）に配置換えになりました。

1979 年 3 月にイスラエルとの和平条約を調印したエジプトがアラブ世界で孤立する一方、イラクのサッダーム・フセイン大統領が独善的な言動を強め、さらに、革命後のイランでは米国大使館占拠・人質事件（1979.11～1981.1）が発生し、イラン・イラク戦争（1980.9～1988.8）始まるなど、1980 年代の中東世界は一層混迷化しつつありました。その一方で、急増した石油収入を利用して野心的な開発計画などを実施し始めた中東産油諸国に対して日本は 1970 年代から 1980 年代にかけて大規模な経済進出を果たしていました。

私が中近東第二課に在籍した 1985 年半ばから 1987 年半ばまでの間は、イラン・イラク戦争が継続し、米欧とイランとの緊張関係が続く中で、日本は両国との政治・経済関係を維持しようと腐心していま

した。特に、欧米諸国がこぞってイランとの接触を停止していたにもかかわらず、日本は同国との閣僚レベルの交流を続けていました。

特に、当時の安倍晋太郎外相（在任 1982.11～1986.7）は「創造的外交」を唱えて、独自の外交姿勢を貫こうとしていました。安倍外相は、米国の否定的な反応を承知の上で、自らイランを訪問（1983.8）し、イランからベラヤティ外相を日本に招待（1984.4）するなど閣僚レベルの交流を続け、1985年7月にはラフサンジャニ国会議長の公賓（国賓に次ぐ公式賓客）としての訪日を実現させました。当時それらの業務を担当していたのは中近東第二課でしたが、イラン側との調整はもとより米国との政策調整や国内関係者への説明に追われる上司や同僚たちが、冗談半分に「股裂き状態だ」と嘆きながら奔走していたのを覚えています。

《東京：活発化した日本・サウジアラビア関係》

私が中近東第二課でサウジアラビア担当であった2年間（1985.7～1987.7）は、日本とサウジアラビアとの間では以下のとおり閣僚や財界首脳レベルの相互訪問、スポーツ使節団の訪問などが頻繁に行われた時期でした。

安倍晋太郎外相サウジアラビア訪問（1985.7）

ヤマニ・サウジアラビア石油相訪日（1986.2）

渡辺美智雄通産相サウジアラビア訪問（1986.4.26-27）（日本・サウジアラビア合同委員会）

日本スポーツ青年団サウジアラビア訪問（総団長：桜内義雄日・アラブ友好議連会長）（1986.11）

サウジアラビア実業家代表団訪日（1987.2）

経済同友会使節団サウジアラビア訪問（1987.3）

ナーイフ・サウジアラビア内相訪日（1987.4.13-18）

往来するこれらの要人や使節団の受け入れや送り出しについての事務的な連絡・調整に奔走しながら、時にはアラビア語通訳にも駆り

出され、また、日本・サウジアラビア合同委員会などには担当官として現地に出張もしました。あっという間の2年間でしたが、今から思えば極めて密度の濃い時期でした。

当時のサウジアラビア内相ナーイフ殿下（HRH Prince Nayef bin Abdulaziz Al Saud）の訪日期間中のひとコマは、今でも印象深く覚えています。1975年から引続き内相を務めていたナーイフ殿下は、アブドルアジーズ初代国王の子息のうち最有力グループである同腹の7人兄弟（スデイリ・セブン）のひとりで、同グループのファハド皇太子（その後、第5代国王）、スルタン国防・航空相（その後、皇太子）に次ぐ実力者と見られていました。外務省としては日本・サウジアラビア関係の重要性に鑑みて、最有力王族の1人であるナーイフ殿下の訪日招待を1987年4月に実現させました。同殿下の滞在中、日本側は天皇陛下拝謁、皇太子殿下午餐会のほか、中曽根総理、倉成外相、葉梨自治相・国家公安委員長（何れも当時）らの政府首脳や財界要人との会談が行われました。

私は中近東第二課のサウジアラビア担当としてナーイフ殿下一行の特別機の受入れや宿舎や警備の手配などに奔走すると同時に、滞在中の主要な行事には連絡要員として同行し、場合によってはその場で通訳としても対応しました。全ての行事日程は予め在サウジアラビアのわが方大使館や先方の在京大使館を通じて双方の都合を確認して設定され、その中に警察庁長官との会談も予定されていました。当日、宿舎の帝国ホテルからパトカー先導で出発した一行の車列が警察庁庁舎（当時）玄関に到着した際に、先頭車両からナーイフ殿下が降車しない事態が起きました。

同殿下の訪問受入れのために帰国していた駐サウジアラビア大使と共に現場に同行していた私は、事情が飲み込めないまま殿下の車に駆けつけると、同乗の在京サウジアラビア大使から「殿下は閣僚ではない警察庁長官とは会談しないので、このままホテルに引き返したい」との発言がありました。

出迎えに出ていた担当課長を含む警察庁関係者は唐突かつ理不尽なサウジアラビア側の対応に納得せず、先導パトカーの出発を認めないと応酬して緊張した空気となりました。同行していた駐サウジアラビア大使（私が通訳）が取り敢えずその場を取りなして、殿下一行はそのまま宿舎に引き返すこととなりました。日本側としては閣僚である国家公安委員長との会談に加えて治安担当の実務上の最高責任者として警察庁長官との会談を設定しましたが、その事情を在京サウジアラビア大使が殿下に十分説明していなかったものと思われました。

そのナーフ殿下は、2009年3月に皇太子後継候補として第2副首相に就任し、2011年10月に逝去したスルタン皇太子の後を継いで皇太子となりましたが、その8カ月足らず後の2012年6月に病死しました。1975年以来、内相としてサウジアラビアの国内治安を担っていた同殿下は、最後まで内相ポストを保持しました。後継皇太子のサルマン殿下（前国防・航空相）も後継内相のアフマド殿下（前内務副大臣）もスデイリ・セブンのメンバーです。しかし、スデイリ・セブンのうち既に3名が逝去し、残った4人も70～80歳台です。2012年11月5日、内相ポストに第2世代のアフマド殿下に代えて第3世代のムハンマド殿下（故ナーフ前皇太子・内相の子息、53歳、前内務次官）が任命されました。サウジアラビア王家も第2世代から第3世代への世代交代が徐々に進んでいるようです。

（続く）